

平成三十年度 聖トミニコ学園中学校入学試験（第三回）

国語

◎ 次の注意事項じこうを読んでください。

- 1 試験開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題はぜんぶで8ページあります。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさんであります。
- 4 解答用紙に受験番号、氏名を書いてください。
- 5 答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 6 字数は、句読点くくつてんや「」をすべて一字に数えます。

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校の頃から友だちと自分を比べることはあつたし、友だちのほうがよくできるのを羨ましく思うことはあつたけど、この頃そういうことが多くなつた。何かにつけて友だちと自分を比べては、自分の劣っている点が気になり、気分が落ち込む。そんなに①シンコクに落ち込むっていう感じではないのだけど、何かイヤな気分になる。そんなことがあるだろう。

思春期になると、だれもがそんな②カンカクに苛まれるようになる。じつは、大人も③1人と自分を比べて羨んだり落ち込んだりしている。こうした比較意識からは、僕たちは一生逃げられないようだ。

ただし、大人になり、人生経験をつむにしたがつて、比較意識による気持ちの落ち込みを適当にごまかせるようになる。人によっては、比較による劣等感を成長のバネにすることさえできる。

でも、まだ人生経験の乏しい青年期には、比較によって生じる劣等感は、大きなダメージになりがちだ。

だれとでも打ち解けて喋れることができれば友だちと比べて、自分は何んでもうまく喋れないんだろう、なんで気をつかっちゃうんだろうといった意識が強すぎると、対人場面で緊張するようになり、友だちに④キガルに声をかけられなくなる。

友だちと比べて運動神経の鈍い自分を意識しすぎると、みんなで⑤キユウギをして遊ぼうというようなことになる、みっともない姿をさらしたくないという思いから、ちよつと都合が悪いからと口実をつけて逃げるように帰ってしまう。

比較意識というのは何とも厄介なものだ。他人はそこまで人のことを気にしていないはずなのだが、自分のほうが強烈に気にしてしまう。何でそんな厄介なものをもってしまうのか。それは、だれでも自分を知りたいからだ。

人と比べることの背後には、自分を知りたいという思いがある。人と比べることを心理学では社会的比較というが、これは自己評価の重要な指標を与えてくれる。

例をあげて考えてみよう。

自分は足が速い。自分は背が高い。自分は太っている。自分は引っ込み思案だ。自分は勉強が苦手だ。これは、よくありがちな自己評価の例だが、こうした自己評価は、どのようにして形成されるのだろうか。生まれつきもっているわけではない。

授業や運動会で駆けっこをするたびにみんなより速いことが多い。鬼ごっこで②捕まらなかつたりすると、「自分は足が速い」という自己評価をもつようになる。

クラスの中で自分より背の高い人が少ないと、自分は背が高いんだという自己評価をもつようになり、自分より太っている人があまりいないと、自分は太っているという自己評価をもつようになる。

授業中にクラスの人たちがみんな⑤セツキョクテキに手をあげるのに、自分は間違つたら恥ずかしいとほとんど手をあげないということになると、自分は④aという自己評価をもつようになる。

クラスの中に自分より勉強ができる人がたくさんいて、自分よりできない人を探すのが難しいということになると、自分は勉強が苦手だという自己評価をもつようになる。もし、もつと学力レベルの低い学校にいたとしたら、自分は勉強が苦手だという自己評価をも

たなかったかもしれない。

このように、僕は社会的比較によって自分の特徴を知ることができるのだ。人と比べてもしようがない、人との比較なんかにこだわる必要はない、自分らしくあればいい、などと言われることがある。でも、自分が劣ることがあっても落ち込まないようになっている。大事なのであって、人と比べること自体が悪いわけではない。何しろ、「自分らしくあればいい」なんて言われても、人と比べないと自分の特徴が浮かび上がってこないのだから。

「A君は、なんであんなふうに受けとるんだろう」と疑問に思うとき、A君とは違う**b**をもつ自分がどこかで意識されている。

「B君はあんなこと言うけど、僕はそれにはサンセイできないな。そういう考え方はイヤだな」と反発を感じるるとき、B君とは異なる**c**をもつ自分をそれとなく感じている。

「C君は何のこだわりもなく羨ましいな。僕は、どうも変なことばかりがあつて、**7**ソンをすることが多い」と思うこともあるかもしれない。でも、ほんとうに羨ましいなら、自分もC君のように変なことばかりを捨てればいい。そうすれば、仲間グループの中で浮くこともなくなるし、先生の言うことに反論して睨まれることもなくなるはずだ。でも、それができない自分がある。自分の信念を捨てて調子よく周りに合わせるということができない。結局、「羨ましい」という思いもあるものの、「あんなふうにはなれない」なりたくない」という**C**キツパリとした思いが心の奥底に潜んでいるのだ。ここにも自分らしきをつかむヒントがある。

「自分って何だろう」

「自分は何のために生まれてきたのだろう」

「自分はどこから来て、どこに向かっているのだろう」

このような問いを**d**という。哲学青年のように人生の探究にはまっている人は別にすると、このようにいかにも哲学ふうな問いと格闘することはないかもしれない。

児童がこんな問いを発してきたら、感心するというよりも、ちょっと驚いてしまう。もちろん、身長や体重に大きな個人差があるように、心の発達にも個人差があるため、早熟な子どもがこのような問いを発することも十分あり得ることだ。

でも、思春期になると、だれもが多少なりとも哲学ふうな問いと無縁ではなくなる。改めてこんな問い方をしないまでも、つかみどころのない自分をもてあます。もつと未熟な言葉で考えるにしても、どこかでこのような問いが気になつてくる。

「自分らしく生きたい。でも、どういう生き方が自分らしいんだろう」「自分らしさって何だろう」といった問いが浮かんできるとは、だれでもよくあるのではないか。自分はこれまでどのような人生を歩んできたのだろう。自分はこの先どのような人生を歩んでいくのだろう。自分は**3**何をしたいんだろう。自分はこの社会で何をすることを求められているのだろう。自分は何をすべきなんだろう。「自分は……」「自分は……」「自分は……」と、この種の問いが押し寄せてくる。このような問いは、より実践的なアイデンティティをめぐる問いとすることができる。

そもそもアイデンティティとは何なのか。これは、精神分析者として心の発達を探索したエリクソンが、心理学用語として**9**ドゥニユウしたもので、「同一性」と訳される。一般に、アイデンティティというときは、自己のアイデンティティを意味する。

アイデンティティとは、自分が自分であることの証明であり、「これが自分だ」「これが自分らしい生き方だ」と言えるようなもの。つかめてきたとき、アイデンティティが確立されたことになる。僕たちが世間で使っているIDカードというのは社会的な立場が⑩メイジされている身分証明書のことだが、自分の生き方の特徴を証明するのがアイデンティティだと言える。

(榎本博明『自分らしさ』って何だろう?)
※設問のため、本文を一部改めた。

問一 〓線①「シンコク」、②「カンカク」、③「キガル」、④「キユウギ」、⑤「セツキョクテキ」、⑥「サンセイ」、⑦「ソン」、⑧「探究」、⑨「ドウニユウ」、⑩「メイジ」のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二 1 2 3 に入る最も適当な言葉を次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア かえって イ 何かと ウ とても
エ それとも オ なかなか カ いったい

問三 〓線A「厄介なもの」とは何ですか。本文から5字以内でぬき出しなさい。

問四 〓a に入る最も適当な言葉を、本文から7字でぬき出しなさい。

問五 〓線B「社会的比較」とありますが、これと同じ意味で使われている言葉を、本文から7字以内でぬき出しなさい。

問六 〓b 〓c に入る最も適当な言葉を、次の各グループから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 〓b ア 創造性 イ 人生観 ウ 感受性 エ 満足感
〓c ア 使命感 イ 価値観 ウ 達成感 エ 発展性

問七 〓線C「キツパリとした思い」とは、どのような思いのことですか。次の〓の中に入る最も適当な言葉を、本文から20字でぬき出し、答えを完成させなさい。

問八 〓 人にはなりたくないという思い。
〓d に入る最も適当な言葉を、本文から14字でぬき出しなさい。

問九 次の文は、本文のどこかの形式段落の最後に入ります。入る直前の7字を答えなさい。

〓 経験を通して徐々につくられてきたものはずだ。

問十 次のア～オの中で、本文の内容に合っていないもの一つを選び、記号で答えなさい。

- ア 人によっては人生経験を増やすにしたがって、劣等感を成長のバネにすることができるようになる。
- イ 人と比べてもしかたないし、人との比較にこだわることは意味がないので自分らしくあればいい。
- ウ 自分より勉強ができない人がほとんどいないと、勉強が苦手だという自己評価を持つようになる。
- エ 一般に自己の同一性をアイデンティティと言い、それは自分の生き方を証明するものである。
- オ 思春期になると、未熟な言葉で考えるにしても多少なりとも哲学ふうな問いと無関係ではなくなる。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

《ここまでのあらすじ》一九八一年、東京郊外の住宅地「若葉ニュータウン」。この団地に住む小学五年生の小川文子は、三期の始業式の日、親友の井口恵美といっしょに体育館へやって来た。

文子が通う枇杷小学校は、若葉ニュータウン初期の中心部、枇杷・中山団地内にある唯一の小学校だ。開校は十年まえの一九七一年四月。第一次入居と同時に開校した、いわばニュータウン草分けの学校である。文子も恵美も七一年入居組なので、学校の

② レキシはそのまま文子たち「団地っ子」のあゆみと重なる。

若葉市を始め、稲峰、松田、桑都の四市に広がる若葉ニュータウンはこの十年で開発が進み、当初一万人ほどの住民がいまや七万人に達する勢いだ。開発したいも西へ西へと広がり、私鉄線の中山駅につづきニュータウンの中核となる若葉センター駅も数年前に開通した。

ニュータウンの中では「古株」となった枇杷・中山地区ではあるが、四階建ての校舎は内も外も a 綺麗で、校庭を取り囲む桜の樹々は太木というにはほど遠い「幼さ」だ。それでも三月も末になると枝いっぱい花を咲かせ、その舞い散る花びらを追いかけて遊ぶのが文子は毎年楽しみであった。

「じゃね」「あとでね」白い息をはきながら文子と恵美は五年一組の列に並んだ。クラスでいちばん背の低い文子は女子の先頭に、ちょうど平均身長めぐみの恵美はまんなかに立つ。

吹きつける風が冷たい。 b 曇った空からいまにも雨か雪が降りだしそうだ。ブルマーしか穿いていない股またのあいだが c 冷える。お母さんの言うとおり毛糸のパンツ、穿いて来ればよかったかな。文子はちよつと後悔する。

校長先生が朝礼台上り、話を始めた。内容はおもに四月に迫った分校の話だった。

1 文子たちが入学したところは一学年三クラスほどだった枇杷小だが、団地の建設が進み、入居者が d 増え始めたここ一、二年でほとんどの学年が五、六クラスというマンモス校になってしまった。プレハブで教室を増やしたもののいっこうに児童数は落ち着かず、

どころかますます増えるいっぽうで、ついに今年四月、枇杷小は新設される南枇杷小とふたつに分かれることになった。

最初に聞いたときはさすがにショックを受けた文子だったが、親友の恵美や仲良しの藤堂由美子、田村佳子たちが同じ枇杷小に残ると知ってからは、あまり深く考えることもなくなっていた。

今朝の校長先生の話もなくび混じりに聞き流し、「ではこれで始業式を終わります」、教頭先生が告げるやいなや、また恵美と手をつないで外よりは暖かい教室へと駆け足で向かった。

教室に戻るとほぼ同時に担任の中西先生が入ってきた。今日は学級会と大そうじだけ。気楽な気持ちで文子は席に着く。

中西先生が出欠を取ったあと、日直の由美子が通知表をカインユウし、先生に届ける。休み明けのせいかわひげの剃りあとが青あおと目立つ中西先生は、今日も太い茶の毛糸で編んだ注とつくりを着ている。「彼女手編みのセーターだよ」と以前恵美に耳打ちされたことがあるが、ぶ厚いレンズを嵌めた黒縁の眼鏡をかけ、いつも寝ぐせで髪がぐしゃぐしゃのこの先生に彼女がいるとは文子にはどうも思えない。

ひと通り新年のあいさつを済ませると、先生はめずらしく改まった声で、

「いまから大事なプリントを配る。みんなよく読んで、かならずお家のひとに渡すように」言い、ホチキスで留められた一枚綴りのわら半紙を配り始めた。手もとにきたプリントの文字を文子は目で追う。

タイトルは「分校の学区変更についてのお知らせ」。つづいて太文字で「児童数の変化にともない、以下のように学区を変更します」と書かれ、「中山一丁目〜三丁目↓南枇杷小 四丁目〜六丁目↓枇杷小……」といった細かい区割りが記されていた。

「二学期の保護者説明会で配ったものと学区がずいぶん違っているから、みんなじぶんの学校を確認しなさい」

先生の声にあちこちで、「えー!」「なんで」「うそお」、ヒメイが上がる。文子はいそいでじぶんの住所を探す。枇杷三丁目四の三の二〇四、枇杷三丁目四の三の二〇四……。あった! 矢印は「枇杷小」を指している。通いなれたこの学校で小学校最後の一年が過ごせるとわかり、文子はおおきく安堵の息をつく。だがその安らかな気持ちは、

「お母さん、たいへん!」

玄関のドアを開けるやいなや、文子は台所にいるらしき母に向かって叫んだ。靴を脱ぐのもどかしく、狭い玄関ホールを駆け抜け台所に飛び込む。

「おかえんなさい。手を洗いなさいね、手を」流しに立つ母がのんびりと返す。

「それどころじゃないよ。見てよこれ」文子は赤い手提げからプリントを摘み出し、母の背中越しにひらひら振ってみせた。ようやく振り向いた母が、濡れた手をエプロンで拭いてからプリントを受け取る。視線が動き、内容を読んでいるのがわかった。

「なに、また学区変わるの」

「そうだよ。あたしは変わんないけど」

「あつそ。じやいいじやない。さ、お昼、食べちゃってよ」プリン
トを無造作に食卓に置くと、^⑧レイゾウコを開け、「文字、お餅い
くつ食べる？」どうでもいいことを聞いてきた。文字はむっとして
「よくないよ。だってめーちゃん、南柑杷になっちやうんだよ」訴
える。

「そうなんだ。残念だね。で、いくつ？」

「残念で済む話じやないよ」

「だってしかたないじやない、決まっちゃったものは。ねえお餅い
くつ食べるのよ」母の関心はあくまでも分校より餅の数にあるらし
かった。

「またお餅？ もう飽きた。べつのものがいい」分校への不満ごと
母にぶつけるが、

「ぜいたく言わないの。かびちゃったらもつたいないでしょ。みつつ
でいいわね」さつさと切り餅を取り出し、トースターに並べ始めた。

ふくれっ面のまま文字は椅子に腰かける。食卓には、きなこと
入ったポウルと砂糖醬油の入ったポウル。これまた正月以来、食
べに食べつづけてきた味だ。弟の拓也が食べたあとのだろう、き
なことは食卓のあちこちに飛び散り、醬油がだらしなくポウルから
垂れている。文字はおおきなため息をついた。

それでもふっくりふくらんだ餅が並べられると、「いただきます」
手を合わせ、まずはきなことポウルに入れた。向かいの椅子に座っ
た母があらためてプリントを見ながら、

「ずいぶん変わるのね。でもまあ中学はいっしょなんだからいいじ
やない、一年くらい離ればなれでも」他人ごとのように言う。

わかってないなお母さんは。きなこと餅を食べ終え、つぎのひとつ
を砂糖醬油にひたしながら文字は暢気な母の顔を睨む。

女子にとって一年も違う学校に通うというのはとてもおおきな問
題なのだ。家は変わらず同じ場所にあつても中学でまたいっしょに
なると言っても、学校が変われば環境が変わる。友だちが変わる。
話題だって変わってしまう。中学で「再会」した恵美といまと同じ
ような関係でいられるのか、そんなの誰にもわからないのだ。

プリントから目を上げ、こちらをちらりと見た母が、「お代わり、
いる？」と聞いてきた。D 難しい顔のまま文字は頷き、「お海苔も
ちようだい」、オゴソカに告げる。

待ち合わせた団地内の公園に、すでに恵美は来ていた。青いぶら
んこに俯いて座り、ちからなく前後に揺らしている。

「ごめんね遅くなつて」息を弾ませ「アヤマると、その声で恵美が
顔を上げた。寒さで赤く染まった頬を涙のすじが伝っている。

「文ちゃん……」言うなり恵美の瞳に、新しい涙のつぶが盛り上
がった。ころころ。音を立てるように涙が零れ落ちてゆく。「なん
で？ なんであたしだけみんなと別なの……」そう言つて恵美は両
手で顔をおおった。ぎい、ぎい。ぶらんこが軋む。

なにか言わねば。文字は焦る。親友のあたしが、なにか元気の出
ることばを。

けれどけっきよく文字の口から注ぎ出たのは、「だいたいじよう
ぶだよ、めーちゃん。家に遊びに行くし、電話だってするし。学校違
っても親友のままだよ」当たり前すぎるせりふだった。そしてE
ぶんでも「ほんとうにその通りなのか」、信じきることばできない

せりふだった。

でも。文子(ふみこ)はじぶん(自分)に言い聞かせる。いまはこう言う(い)しかない。そう信じる(しん)しかないのだ。

顔をおおつたまま、恵美(めぐみ)がなにごとかつぶやいた。

「なに？」文子(ふみこ)は空いているもう片方(もうひとへ)のぶらんこ(ブランコ)に乗り、からだを恵美(めぐみ)に寄せる。ふたたび恵美(めぐみ)がつぶやく。

「……約束、だよ。文子(ふみこ)ちゃん。ずっと親友(きんゆう)」

「約束する。ずっとめーちゃんといっしょにいるよ」文子(ふみこ)は言い、恵美(めぐみ)の顔をしたから揃(すく)うように覗きこんだ。恵美(めぐみ)がちいさく頷(うなず)く。

「押(お)してあげるよ、めーちゃん」

文子(ふみこ)はぶらんこを降り、恵美(めぐみ)のうしろにまわって鉄(くわ)の鎖(さ)を掴(つか)んだ。そのまま後(うしろ)ずさりして、ぶらんこを持ち上げる。恵美(めぐみ)のからだ宙(そら)に浮(う)いた。⑩「ゲンカイ」まで引(ひ)つ張り上げ、ぱつと手を離(はな)す。ぶらんこが勢(いきほ)よく風(かぜ)を切る。さらに速(はや)くおおきく揺(ゆ)れるよう、文子(ふみこ)は恵美(めぐみ)の背(せ)中(ちゆう)を押(お)した。声を上げて恵美(めぐみ)が笑(わら)う。笑い声(わらひこゑ)が嬉(うれ)しくて、文子(ふみこ)は押(お)す手にさらにちからを込(こ)める。鈍色(にびいろ)の空(そら)に、恵美(めぐみ)の赤(あか)いスカート(スカート)が翻(ひるがえ)る。

(なかざわひなこ 『中澤日菜子『ニュータウンクロニクル』』)

注1「とっくり」…お酒を入れる器(うつわ) (徳利(とくり))の形(かたち)に似た襟(えり)のセーター。

ターゲットネットワーク。

2「まろび出た」…転(まわ)がり出(で)た。

問一 線①「入居(いりぐ)、②「レキシ」、③「勢(い)、④「カイシユ

ウ」、⑤「済(ませる)」、⑥「ヒメイ」、⑦「指(して)」、⑧「レイウコ」、⑨「アヤマ(る)」、⑩「ゲンカイ」のカタカナは漢字(かんじ)に直し、漢字(かんじ)は読み方をひらがなで答えなさい。

問二 線1「草分け」・2「改まった」の本文(ほんぶん)での意味(いみ)とし

て、最も適当(てきとう)なものを次(つぎ)から一つずつ選(えら)び、それぞれ記号(きごう)で答えなさい。

1「草分け」

ア 草(くさ)だらけの荒地(あらいち) イ 物事(ものごと)を初めて行(い)う

ウ 草木(くさき)でつくられた エ 昔(むかし)から続(つづ)いている

2「改まった」

ア 古い物(もの)が新(あたら)しくなった イ 良い方向(かたうち)へと変(か)化した

ウ 普段(ふだん)と違(ちが)って堅(かた)苦(く)しい エ 病氣(びやうき)の状態(じょうたい)が良(よ)くない

問三 a、b、c、dに入る最も適当(てきとう)な言葉(ことば)を次(つぎ)

から一つずつ選(えら)び、それぞれ記号(きごう)で答えなさい(同じ記号(きごう)をくり返し使(つか)うことはできません)。

ア どんより イ うっとり ウ どんどん
エ すうすう オ まだまだ

問四 —線A「幼さ」とありますが、ここから分かるのは、桜の樹々のどのような様子ですか。10字以内で考えて答えなさい。

問五 次の一文を入れる所として最も適当なのは1〜4の中はどこですか。1〜4の数字で一つ答えなさい。

いっしょに育った友だちの半数がいなくなる。

問六 —線B「安らかな気持ち」とありますが、文子がこのような気持ちになったのはなぜですか。30字以内で説明しなさい。

問七 —線C『やだーッ!』恵美の叫び声」とありますが、恵美はどういうことに関して「やだ」と叫んだのですか。20字以内で説明しなさい。

問八 —線D「難しい顔」とありますが、このような顔をしているのはなぜですか。理由として適当なものを次から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア どうすれば恵美と同じ学校に通えるのか考えているから。
- イ 餅に飽きたと言ったのにお代わりするのが気まずいから。
- ウ 分校について母が無関心なことに不満を感じているから。
- エ 親友として恵美にどんな言葉をかけるか悩んでいるから。
- オ 実はもう分校の問題には興味がないことを隠したいから。

問九 —線E「じぶんでも『ほんとうにその通りなのか』、信じることのできない」とありますが、それはなぜですか。次の1〜4に入る適当な言葉を、本文からそれぞれ3字以内でぬき出し、答えを完成させなさい。

学校が変われば環境が変わり、1や2だって変わってしまうため、中学で「3」してもいとと同じような4でいられるのかはわからないから。

問十 次のア〜エについて、本文の内容に合っていれば「○」、合っていないければ「×」と答えなさい。

- ア 文子は、始業式で校長先生から分校の話を聞いて大きなショックを受けた。
- イ 中西先生は、分校の学区が、以前説明した内容から変更になったと伝えた。
- ウ 母は、文子が通う小学校が変更になるにも関わらず、暢気な顔をしている。
- エ 恵美は、環境の変化が不安で、今後も文子とはずっと親友だと確認した。